



自殺幫助法



jadequerida

はじめに

小生がこの本を書こうとした動機はたまたま知人が次のような話を打ち明けてくれからだ。「私の隣家に舅である老婆とその姑が住んでいた。舅は80歳と90歳の間ぐらいで糖尿病を患い足が不自由でほとんど歩けない。時折救急車がやって来て老婆を何処かへ連れて行く。多分病状が悪化して病院へ連れて行ったのだろう。姑は70歳強の感じだが、意地が悪く在宅しているときは殆んど一日中舅を怒鳴りつける。それも単純に怒鳴りつけるのではなく、悪言罵倒、聞くに堪えないようなひどい怒鳴り方で舅は家の中にいるのが耐えられないのか時々玄関先に出てきて座って日向ぼっこをしている。舅の息子（姑の夫）が生存中はこのようなことは無かったのに、息子が死んでからはひどくなって全く聞くに耐えないという。あるとき、玄関先で日向ぼっこをしていた舅に偶然出くわした。そのまま立ち去るわけにも行かず、老婆の横に座り挨拶をしたところ 老婆は涙を流して 毎日姑にどんなに酷いことを言われているかをかをめんめんと話した。毎日、死にたいと思い神様に早く連れて行ってくださいとお祈りしているが未だに連れて行ってくれない。車に飛び込んで自殺しようと思ったことが何回もあるが、車が走って来る場所まで歩いていくことができない。兎に角早く死にたい。それ以外に何も考えられない。自分は老女虐待で

警察に訴えることを考えたが、暴力を振るっているわけではないので証人が必要である。舅の家族は面倒なことには拘わりたくないという感じで証人になることを頼んでも到底了承は得られそうもない。そうすると幾ら説明しても信用してもらえないことになる。老婆には申し訳ないが自分としては何も出来ない。老婆はこれ以上生きる意志は無く

一日も早く死ぬことを望んでいる。幸いなことに、老婆はその後 糖尿病が悪化して病院で亡くなった。小生は

ショックを受けた。神はこれ以上の苦しみが無いというほど苦しんでいる人間に我慢して「生きなさい」とは言って

いない。世の中には死にたいと思っても死ねない人がたくさん居る。何とかできないものであろうか。

安楽に死ぬことは永遠に変わらぬ人間の持ち続けている夢である。

自殺

2008年1月の新聞に次のような記事が載った。（昨年の「孤独死」60人 - 悲しすぎる最期 - 大震災13年 8年間で500人超）

兵庫県内にある阪神淡路大震災（1995.01.17）の被災者向け公営住宅（復興住宅）で一人暮らしの入居者が誰にも看取られずに亡くなる「孤独死」が2007年の一年間で60人に上ったことがわかった（2011年度は36人）。仮設住宅が解消した2000年以降、8年間の孤独死数は522人になった。死後一日以内の発見が39人で65%。最も遅かったのは神戸市の男性で当時81歳で死後20日以上だった。死因は病死が多いが、自殺も8人。60人の平均年齢は75歳だった。

復興住宅はHappy Active Townの頭文字をとって「HAT神戸」とかベルデ名谷とか素晴らしい名前がつけられているが実態は名前からは正反対の（浴槽で死んだ男性）（当時84歳の白髪の女性は洗面所でうつぶせに倒れていて、風呂に入ろうとしたのか、下半身は裸で動かそうとすると黒く変色した皮膚が剥がれ落ちた）（浴槽で死んだ男性）（買い物帰りで玄関で腰を下ろしたまま死んだ女性）（「生きていても仕方がない」とよくもらしていた当時64歳の男性は14階から飛び降り自殺した）等々 悲しい話で満ちている。

住宅を与えられても生きるための何かが（生きることを支えるもの・希望とか、友達とか、話し相手とか、親しい家族とか、傷みを分かち合う人々とか、信仰とか、趣味とか、何かに対する興味等々）がなければ死にたくなる。

特に今後の生活をしていく上での十分な収入が見込めず、生活不安が心を蝕み重い心理的苦痛に襲われると尚更である。上記60人のうち自殺は8人との事だが実際には60人全員が自殺を考えたに違いない。自殺する方法がわからなかったり、一歩踏み込む力がなかったりして不本意ながら生きながらえていて、力が尽きて絶命されたのが孤独死であろう。上記の自殺した人の言葉「生きていても仕方ない」という言葉が死にたくなった動機をよく表している。

東日本大震災（2011.03.11）でも3-4年もすれば同じようなことが起こるのであろうか？皆で助け合う共同生活とか大勢の人と触れ合う機会がある間は深刻に考える時間もなく苦しいながらも時間が早く過ぎていく。復興には程遠いが一応仮設住宅に落ち着いたりして今後の生活、生き方、展望などを考え始めると不安が増幅する。若い人は力もあり、多くの若者が再起する力を持ち合わせているだろうが高齢者は若い人と同じではない。

2012年1月8日TVでNHKが放映した震災後の失業者の実態報告をみた。震災で失業した人は現在でも12万人も居る。50代が最も多く、その次が60代である。失業者の1/3は一ヶ月の収入が10万円に満たず、極めて厳しい生活を強いられていて 収入5万円以下の貧困レベルの人も沢山居る。自営業者は失業給付なしで収入ゼロである。貯金は日に日に目減りしていき明日の生活費を何とかしようとして職探しに駆け回るがあるのは瓦礫集めのような一時的な仕事しかなく、その瓦礫集めの仕事さえも高齢者は敬遠されて仕事が貰えない。自営業者が立ち上がるためには資金が要る。いろいろ復興資金制度があるようだけれど、よく調べてみると、実際に利用できる

ものはなく、二重ローンに頼るしかない。返済の可能性が危ぶまれ破滅への道を歩むことになる。

ある60歳代の男性は津波で妻と子供を失い、茫然自失、脱力感が襲い「これからどうしよう」など考えることはとても出来ないという。どうして、自分だけが残され苦しまねばならないのか。考えることは「死」である。「早く

妻子と一緒にになりたい」思うのはそれだけである。世の中からはみ出して孤立してしまうと思うようになり一日の時間が経つのがとても遅いように感ぜられる。新しい仕事もなく支えてくれる家族も居ない。同じような境遇にある被災者の多くが「死」を考えている。小生は75歳、三月には76歳になる。もし、大震災で被災し、すべてを失っていたら直ちに「死」を選んだらろう。然し、死にたいとは思っても自殺する勇気があるかどうかわからない。子供の時、運河に浮かんでいた水死体を見たことがある。腹部が異常に膨れ、顔はよく見えなかったが腫れているようで「土左衛門」（どざえもん）と呼んでいた。醜い捨てられた大きなごみのような感じであった。踏み切りで電車が通過するのを待っている時、人が飛び込み自殺をして人が電車に大の字に貼り付けられたような形で前を通り過ぎていった。300メートル程先で電車は停止したので見に行こうとしたら一緒に居た大人の人が夜、思い出して怖くて夜、眠れなくなるからやめなさいといわれ見に行かなかったが、後で、実際に見た人に話を聴くと、血とか肉とかが飛び散り思わず顔を背けたという話しであった。首吊り自殺の実物は見たことがないが映画とかTV,絵画等で見ると「うらめしや」と言って現れる幽霊のようで感じのよいものではない。ブラジルとか米国とかのように銃器の規制が比較的緩やかな国では、こめかみに一発打ち込めば終わりだが、それでも検視とか複雑な手続きがあって残ったひとに迷惑がかかる。何よりも検視官をはじめ多くの人目にさらされるのはやりきれない。自殺したいと思ってもなかなか踏み切れない。入水自殺をして自分が土左衛門になって川にプカプカ浮かんでいる姿を想像するとぞっとする。日本では14年間、毎年自殺者が30,000人を超えたということだが自殺した人は自殺を執行しなければならないほど追い詰められ死後の自分の姿など考える余裕がなかったに違いない。死後の自分の姿を想像すると死にたいと思っても実行にはブレーキがかかる。

帝国バンクの発表によると震災関連の倒産は510件にのぼり、阪神淡路大震災の13倍の7273億円に上る。今後の自殺者の数も阪神淡路大震災の何倍にも上るのではないかとういやな予感がする。アルコール依存症が急速に広がりつつあると言う。

自殺

変死体解剖34年の経験を持つ元東京都巻監察医務院長で医学博士という人の書いた「自殺死体の叫び」という本を読んだ。この本を読んでまず感じるのは自殺する本人は死後の事なんか考えていないが「自殺」すると多くの人に多大の迷惑をかけ、死体捜索とか解剖とかを含む後始末の費用も馬鹿にならないということである。東京の銀座で自殺者がビルから飛び降りて通行人を巻き添えにした事件があったとの事で、全く関係のない通行人が命を奪われ、自殺者の無責任さに憤りを感じるとの事だが、全く同感である。次のケースは自殺名所の樹海で自殺する場合で以下本文から引用: (都会の喧騒を離れて、人目に触れずに雄大な大自然の中で最期を迎える樹海での自殺は、ロマンチックな死に方だと広く思わがちである。しかし、その実態は、美しいイメージとはあまりにもかけ離れたもので、大自然の営みである食物連鎖の中で動物や昆虫に食い荒らされて野ざらしにされたまま朽ち果てていく、むごたらしい死に方以外のなにものでもなかった。自殺の名所、富士山の北西に広がる美しい青木ヶ原の樹海での自殺がこのようなむごたらしい結果になることに驚く人もおられようが、これは真実である。) 以下小生の文<現代人ホモサピエンスの前に存在したネアンデルタール人は人類では初めて死体を埋葬した。彼らは最初は死体と同居していたのだが、死体が腐敗し、死体が鼠や昆虫などに食い荒らされていく様子を自分に重ねあわせ、怖くなって死体を自分たちから見えない所に隠したのである。この時の恐怖が現在まで続き、現代人も死に対する恐怖を持っている。>以下 上野博士の文に戻る: (どんな自殺方法でもそうだが、眠るがごとく楽に死ぬる方法などこの世に存在しないというのが持論である) とは34年の経験を持つ元監察医務院長のお言葉である。この本では服毒自殺に使われる毒物を丁寧に説明されているので本文のまま引用させていただく:<いわゆる毒物と呼ばれるものを法医学的にわかりやすく作用別に分類してみると、睡眠剤なども含めて服毒自殺に使われるものは腐食毒、血液毒、神経毒、食品毒の五種類に分類できる。それぞれの特徴を簡単に説明しておくが、腐蝕毒は、強酸やアルカリなど、刺激が強く、接触した皮膚や粘膜などを腐蝕し、壊死を起こすものである。これを飲めば、口から胃腸にいたるまで、びらん、出血、壊死などを生じ、嘔吐や激痛、苦悶に苛まれながら死に至る。次の実質毒は、血中に吸収された後、諸臓器の細胞に障害を与え、組織実質の変性を生じて臓器不全から死亡する。三番目の血液毒の代表は自殺にも殺人にもよく使われる青酸化合物である。血中に吸収され、血液のガス交換作用を阻害し、内窒息させる。次の神経毒は、血中に吸収された後、主として中枢神経に作用するので、消化器系や諸臓器に変化を起こさせることは少ない。昏睡状態を続けてやがて死亡する。死に切れなかった場合、脳の神経細胞がやられて再生不能になると、大変な後遺症を残すことになる。かつて手軽に使われた睡眠剤がその代表である。最期の食品毒は省略。服毒自殺でなによりも問題なのは、死にきれなかった場合の後遺症である。肉体の機能が著しく損なわれたり、或いは脳内の神経がやられて、人間としての尊厳が保てない状態で生き続けなければならないこともある。安易に死ぬると考えられている睡眠剤でも、それは同じである。(以下省略) 服毒死はやめておいたほうがよさそうである。自殺するのは簡単でないことがよくわかる。然し、死にたくても死ねなくて生きているのも また惨めなものである。

自殺

現在の日本では自殺は法的には犯罪とされていないようだが、飛び込み自殺などにより第三者に被害が発生した場合には刑事手続上は重過失致死などの罪により被疑者死亡で送検され民事上は自殺したものの遺族に対して損害賠償責任が発生することがある。他人を自殺させること、自殺を幫助することは自殺関与罪（刑法202条）の犯罪とされる。単独の自殺未遂は現在の日本の刑法では刑罰に処せられる事はないが、複数で行った場合は相互に処罰される（自殺関与/同意殺人罪）。ガス自殺など他者に危険を及ぼした場合は被害がなくても未遂も処罰される。（以上ウィキペディアより引用）

TV（NHK）で見たのだが郷里を離れて東京で下宿をしていた学生が下宿の一部屋で首吊り自殺をして命を絶った。暫くして自殺をした学生の親元へ500万円の賠償の請求書が届いた。理由は家主は下宿部屋の家賃以外に収入がなく、学生が自殺したために部屋の借り手がなくなり、生活出来なくなったためだという。家主にしてみればもっともな話だが、息子をなくした上、500万円を請求された親はいかなる心境であろうか。親不孝な息子である。同様の話は結構あるようで裁判沙汰もあるということである。残された遺族も辛く、肩身の狭い思いをする。

無責任な大衆は「お前たちが自殺に追いやったのだろう」等 酷いことを言う。自殺は技術的な困難さに加えて種々の問題を引き起こす。簡単に、しかも、何の苦しみもなく安楽死が出来る自殺が出来ればこんなにもいいことはないと思う。小生は「大往生」という言葉が好きである。永六輔さんの解説によれば「大往生」というのは死ぬことではなく、往生は往って生きることで、西方浄土に往って生まれることだという。「成仏」という言葉も美しい言葉である。親鸞は比叡山に上り、大乘菩薩戒を受けてから12年間比叡山を出ることなく、比叡山にこもって勸業を学び修した。然し、仏を感得することが出来ず山を下りた。しかし、死後は間違いもなく成仏されたことであろう。宮沢賢治は地球で生きている時から宇宙と合体していた。現在は宇宙を飛び回って「銀河鉄道」のような美しい童話をいっぱい創られているに違いない。小生は「死」とは「生命」が有機体から抜け出して宇宙へ飛び立っていくことであると確信している。

先進諸国では核家族化が進み高齢者の独居・単身世帯が増えている。日本でも同様である。80歳を過ぎても陸上競技大会や水泳大会に参加して活躍する人も居れば90歳近くになって一人で外国旅行をする人もいる。ダンス、ヨガ、体操、読書会、集団でバス旅行等々高齢者が生き生きと参加して楽しんでいる例も多々ある。高齢になっても健康で経済力もあり、自分の住む場所を持ち、人生の余った時間を好きなように過ごしている人も少なからず存在する。然し、高齢者全てがそのように恵まれた状態にあるのではなく、自ら家族や社会との関係を断ち切り、社会から疎外することを好み、孤立してしまったり、精神障害があったり、人との付き合いがどうしても苦手で一人でひっそりと暮らしたいとか、経済的に余生を楽しめるような余裕がなかったりして社会的に孤立してしまう人が居る。このような人達は「孤独死」の予備軍である。「孤独死」とは一人暮らしの人が誰にも看取られず、死後に発見される人のことである。尤も「はじめに」で書いたように一人暮らしではなくて家族と同居していても死にたいと考える人も少なからず居る。

「孤独死」の予備軍の多くが自殺したいと考えている。自殺する人は高齢者だけに限らず若い人も働き盛りの人も

居るが、この人たちの自殺は原因や動機が多岐に亘り本書ではカバーしきれないので別の機会に譲り、本書では高齢者の自殺だけを取り上げる。小生は原則的には若い人たちの自殺には反対である。折角、2億5千万ヶの精子（チンパンジーは6億3千万ヶ）から唯一つ選ばれてこの世に出てきたのに、早々にこの世からおさらばするとは勿体無い話ではないか。世の中が不況になったり困難を強いられるようになるとしわ寄せは常に老人に寄せられる。十分な収入のないお年寄りにとっては暮らしにくい世間だ。日本では昔、老人が口減らしのために姥捨て山（うばすてやま）という山に捨てられたという話が伝わっているし、世界各地に棄老の風習が民話や伝説で伝えられている。ダーウィンの航海記には1832年12月25日付けでTerra del Fuogoでは土人は飢饉になると犬を殺す前に老婆を殺して、その肉を食べていて、飢饉が迫ると老婆達は恐怖にかられて奥山に逃げ込むが、大抵は連れ戻されて炉端に吊り下げられて煙で窒息させ、食べるという事実を記録している。犬はかわうそを捉えるので犬のほうが老婆より貴重だったのである。「孤独死」の予備軍を何とかして救えないものかと思う。

自殺志願者の急増

ギリシャ危機を発端にユーロ圏がゆれている。この危機は解決できるのか？今のところ誰にもわからない。専門家と称する人々がいろんなことを言う。知識のない我々にはよく分からないが、専門家の言うこともあまり当てに出来ない。然し、現在、世界経済が危険な状態に置かれているという雰囲気は察知できる。ユーロ圏が崩壊することはないと思うが、ユーロ圏から生じた危機は引き伸ばされ、引き伸ばされて長く続くだろう。

1月17日（2012年）世界銀行は2012年の世界全体の実質経済成長率を2011年6月時点の前回見通しの3.6%から大幅に下方修正し2.5%と予測した。発展途上国で5.4%、先進国では1.4%との予想である。昨年6月の6.2%と2.7%から大幅に下がった。2013年にはさらに悪くなるだろう。ユーロ圏が世界経済に与えるダメージは大きく先行き不透明感が広がる。世界経済の牽引役の一端を成すブラジルに住んでいる小生にも事態の深刻さが感ぜられる。

スペインの失業率は96年以降最悪の21.5%に達し、悪いことに16-24歳の失業率は45%に達する。働く能力があり、働きたい若者の半数近くに職がない。何かが間違っている。高齢者の年金は現役の働いている人たちが支えるのは大方において世界共通だ。老人を養う現役組が減れば当然年金制度そのものに支障をきたすし、若いときに働けず、保険料を払えず、受給資格の出来ない人たちの老後はどうなるのだろうか。市民には社会への不満や不安、やり場のない怒りが渦巻いている。失業率が10%を超え、国債の金利が異常に上昇した（現在は下がっている）イタリアではマフィアが経済を牛耳る力を強め、イタリア最大の銀行を持ち、多くの中小企業から搾取していて、マフィアの年間取引高は約1400億ユーロ（約13兆7千億円）、利益は1000億ユーロを超えているということである。米国でもギャングが急増し2011年4月時点で140万人に上り2年前と比べて40万人増えたという。不景気になると藁にもすがりたい思いでマフィアの高利の金に手を出し、マフィアは取り立てはおてのものだからマフィア銀行は益々太っていく。イタリアでも米国でも失業している若者を吸収して組織は益々強大になっていくという構図かもしれない。イタリア・マフィアは老人ホームや障害者施設などの経営にも乗り出してきているという。

自殺志願者の急増

2011年9月17日、米国の金融中心地ウォール・ストリート周辺に10代後半から20代前半の人達を中心に約1500人が集まり17日から18日にかけて延々と総会を開き「経済危機や貧困など、解決すべき問題が山積みしているのに企業の拝金主義が社会を牛耳っている」「貧しい人も生きていけるように社会構造を変えるべき」「金融街に群がる僅か1%の人間が世界経済を牛耳り、99%が苦しんでいる」「大学を卒業して学生ローンがあるのに就職できない」などを話し合っていました。この経済格差の解消を訴える運動はあっという間に世界中に広がり世界中で格差の拡大や富裕層への富の集中に抗議するデモや集会が開かれました。世界中から富の富裕層への集中に抗議する声が響きます。

専門家は米国の経済見通しに楽観的な見方をしていますが、たとえばAppleのiPadはSteve Jobsの作品ですが実際に製造しているのは台湾とか中国のメーカーですから両国の雇用を増やしても米国の失業率改善には役立ちません。最近では米国で一番か二番目に金を使うのはブラジルからの観光客との事で、小生が昔マイアミへ行ったときは日本のパスポートを所持している小生は入国審査もフリーパスのような状態でさっさと通過しましたがブラジルのパスポートを持っている人達は一箇所に集められ、厳重なチェックを受け、ブラジルでの米国の領事館で受け取る米国への入国査証も非常にうるさく大変でしたが最近は査証を受けるのが以前より楽になりさらに改善されるということです。オバマ大統領自身が米国はブラジル人が米国に落とすお金が必要だと演説で言明するほどに変わりました。米国製品といっても大概は中国とか東南アジアで製造したものなので米国の失業率の改善には役立ちません。公共事業とか太陽発電のような新しい事業で職を生み出すしかないのでオバマ大統領も大変です。米国では貧困地区の人口が過去10年間に32.9%増加し犯罪発生率の増加や教育の質低下等で貧富の差の固定化が進む恐れがあると専門家が警告しています。米国は世界一の富裕国という印象がなくなり富が一部の富裕層に益々集中し貧乏人が多くなって社会主義的な傾向に変わりつつあるような印象を受けます。米国の低所得者層の老後はどうなるのか他人事ながら気になるところです。

自殺志願者の急増

老後について さらに言及すると福祉先進国のデンマーク、スウェーデン、ドイツなどでも財政難からこれまでの仕組みの維持が難しくなっています。ドイツのあるコンピューター関連企業に勤め約50万円の給料を受け取るサラリーマンの場合、年金、医療などの社会保険料20%と所得税など27%が天引きされ、手取りは半分しかなく、そのうえ買い物をすると16%の付加価値税がかかります。ドイツ人労働者の総賃金に占める社会保険料率は平均42%で労使折半。雇用コストが高すぎるとして本社の海外移転の検討をしている大手企業もあるということです。「今後の年金保険料率引き上げを小幅に抑えるには、需給年齢の引き上げや受給金額の凍結しかない」と社会保険制度の専門家は提言しています。上記のサラリーマンは「現在の水準の年金は将来、受けられない」と覚悟を決めているということです。デンマークやスウェーデンでは高齢化による重介護者の増加に頭を悩まし自治体から有料の民間企業に振り替えるケースが増えているということで、専門家の話では民間委託の流れは変えられず、高齢者ケアの質低下は否めないということです。世界中で財政難からこれからの高齢者の介護問題が難しくなることが顕著になっています。

中国は現在60歳以上の人口が1億7千800万人で2050年には4億3千700万人に達し、総人口の1/3を占めるということです。世界銀行の統計によると中国には約3万8千軒の養老機構があり270万床のベッドを提供しているが60歳以上の人口の1.8%を満たしているに過ぎず、先進国の平均の8%に比べると大きく遅れています。政府は民間組織によるケア業務参入に期待を寄せており、外国企業も参入し始めていますが、彼らの対象は月約36万円の介護料を必要とする富裕層対象で政府は貧困層への対応の問題を解決しなければならないということです。

自殺志願者の急増

速い経済成長で家計の収入が着実に増えているアジアの新興国は老後の生活を比較的楽観視しているということですが、韓国人は老後の心配が世界最高だということです。（ハナHSBC生命調べ）

振り返って 日本の状況を見てみますと、次に述べるように悲観的にならざるをえません。国立社会保障・人口問題研究所（www.ipss.go.jp）の推計によりますと2011年に総人口126,913千に対し

15-64歳の生産人口は81,015千で65歳以上の高齢者は29,704千なので一人の高齢者を養う生産人口は2.727人ですが2030年（現在40歳の方は59歳になる）には総人口115,224千に対し15-64歳の生産人口は67,404千で65歳以上は36,670千で1.83人の生産人口となり二人に満たない生産人口が一人の老人を養うこととなります。15-64歳の方には大変な負担になるし受給年齢の更なる引き上げとか受給額の減額とかが必要となります。2050年（現在30歳の方は69歳になる）では95,152の総人口に対し15-64歳の生産人口は49,297千ですが65歳以上は37,641千となり1.3人の生産人口が一人の高齢者を養うこととなります。「失われた20年」に青春を過ごし閉塞感に覆われ、生きづらくなっている社会に生きているこの世代は老後も年金の受給額が大幅に引き下げられて苦しい生活を強いられます。

自殺志願者の急増

速い経済成長で家計の収入が着実に増えているアジアの新興国は老後の生活を比較的楽観視しているということですが、韓国人は老後の心配が世界最高だということです。（ハナHSBC生命調べ）

振り返って 日本の状況を見てみますと、次に述べるように悲観的にならざるをえません。国立社会保障・人口問題研究所（www.ipsr.go.jp）の推計によりますと2011年に総人口126,913千に対し

15-64歳の生産人口は81,015千で65歳以上の高齢者は29,704千なので一人の高齢者を養う生産人口は2.727人ですが2030年（現在40歳の方は59歳になる）には総人口115,224千に対し15-64歳の生産人口は67,404千で65歳以上は36,670千で1.83人の生産人口となり二人に満たない生産人口が一人の老人を養うこととなります。15-64歳の方には大変な負担になるし受給年齢の更なる引き上げとか受給額の減額とかが必要となります。2050年（現在30歳の方は69歳になる）では95,152の総人口に対し15-64歳の生産人口は49,297千ですが65歳以上は37,641千となり1.3人の生産人口が一人の高齢者を養うこととなります。「失われた20年」に青春を過ごし閉塞感に覆われ、生きづらくなっている社会に生きているこの世代は老後も年金の受給額が大幅に引き下げられて苦しい生活を強いられます。

自殺志願者の急増

このような状態になると年金保険料率の大幅引き上げ、受給年齢の更なる引き上げ、受給金額の減少などをもってしても現行の年金制度の維持は難しくなります。民間の保険会社の参入割合を増やしたり、難しいでしょうが、解決策を見つけなければなりません。増税もひっきりなしにやってくるので個人負担は耐えられる限界を超えます。海外に駐在している人は重い負担に耐え切れず、日本国籍を放棄して負担の少ない国の国籍を取得するようなことが頻繁に起こるようになります。若い優秀な技術者とか経験と知識の豊富なベテランも海外へ転居するでしょう。大企業も本社の海外移転を検討せざるをえないでしょう。韓国の「ネット経済大統領」朴大成（パク・テソン）の言葉は傾聴に値します:「建築業を営み、家も貯蓄もある裕福な中産層だったが、友人は大学へも行けなかった。国家が決して個人を保護してくれないことが分かった。」「よく勉強し、よい職場に就職し、誠実に働けば老後や子供の事は何とかかなるという神話が崩れた。それなら経済を自分が理解し、自分で準備しなくてはならないと思った。」（彼の友人の父親は1997年のアジア経済危機に直撃され、自殺した。） 小生がブラジルへ移住した当時（1958）には「海外へ雄飛」という言葉がはやり、小生も海外へ雄飛する一員としてNHKのラジオ番組で喋らされ記念アルバムをもらいました。「海外雄飛」という言葉は死語となり、日本の重い個人負担を逃れて余裕のある生活を希望する人達が海外へ移住する「海外転居」がとって代わります。非正規雇用なんて言葉は小生が日本に居た時代には存在しなかった。一時的に雇用される臨時採用のようなものはありましたが、あくまで「間に合わせ的」なもので現在のように長期に亘る非正規採用なんて言葉は存在しなかった。あの当時は「金持ち」といってもたいしたことはなく日本人全体が貧乏人といった感じで、マイアミへ商用で旅行した友人が現地の建物の雄大さと豪華さに圧倒され別世界と表現したほどでしたが、現在は統計がないのでよく分かりませんが、日本も米国に劣らぬほど格差が激しいのではないかと想像されます。

自殺志願者の急増

2050年はポスト中国の時代でベトナム、インド、タイ、インドネシア、マレーシア等東南アジア諸国の台頭が著しくなり、米国も勢いを取り戻しヨーロッパや日本のようなもと先進国も力を取り戻してきます。然し、個人の負担が軽減しない限り、負担の少ない国へ移住する日本人は減らないでしょう。

2010年度に日本で65歳以上の高齢者が家族、親族や介護施設職員から虐待を受けたケースは前年度から6.7%増加し1万6764件に上りました。加害者は息子がトップで42.6%、夫16.9%、娘15.6%であり、この中には（はじめに）の項で述べたような自殺予備軍（自殺志願者）が多く含まれていると思われます。生活保護者が206万人近くになり、過去最多を記録しました。残業代不払いは1386社123億円に上ります。サービス残業は過労死の温床といわれています。経団連は定期昇給の凍結を宣言しました。貿易収支は31年ぶりに赤字に転落しました。原発事故に伴う火力発電燃料の輸入額が大きく膨らんだのが原因で一時的なものと報じられていますが、原因は多々あり、長い期間赤字が続く事が予想されます。これが現在の日本の実情です。自殺志願者の増加を防ぐことは出来ません。

2011年12月12日のDIANOND onlineに次のような記事が掲載されました。"倒産ラッシュ前夜の中小企業 再起を図るための「廃業のススメ」:中小零細企業が、今、まさに崖っ淵まで追い込まれている。急速な円高に加え、中小企業を優遇する法律の期限切れが迫るなど取り巻く環境が悪化しているためだ。金融機関も準備を進めており、まさに「倒産ラッシュ」前夜の様相を呈している。ひとたび倒産すれば、凄絶な地獄が待っている。取引先や債権者に多大な迷惑をかけるばかりか、一家離散など不自由な生活を強いられてしまう。だが、そうした事態を回避する方法がある。「廃業」だ。上手に廃業すれば、普通の生活をおくれるのはもちろん、再び、事業を興すことも決して夢ではないのだ。(以下 一部省略) 早いうちに、事業の将来性を見極めたことで、銀行や取引先にも迷惑をかけずに済む。一般に廃業では資産が負債を上回る状態であることが多く、自ら事業をやめる決断を下せるのである。これに対し「倒産」となると事態は異なる。資金繰りに窮し、債務超過であるケースも多く、廃業に比べれば周囲に多大なる迷惑をかけてしまうのだ。(以下 一部省略) しかも 今後は 更なる「大倒産時代」に突入しそうだというから恐ろしい。2010年の倒産件数は1万3321件と前年比約14%減ではある。だが、これが「倒産予備軍」ともなると「4万~5万社に及ぶ」(友田信夫・東京商工リサーチ 取締役本部長)というのだ。(以下 一部省略) 金融機関の隠れ不良債権は5兆円との指摘すらある。(以下 一部省略) 「廃業」と「倒産」。会社をたたむ事にはわかりありませんが、その行く末は「天国」と「地獄」ほどの差があります。「他人に迷惑をかけない(廃業)のススメ」では罷業のメリットやノウハウをぎっしりと詰め込みました"

この「他人に迷惑をかけない「廃業」のススメ」と自殺幫助とは共通点がある。— 他人に迷惑をかけないことと自分自身が苦しまないことである。自殺を薦めるわけではないが、「生きるのはもう 沢山だ。死なしてくれ—」と叫んでいる人を苦しまずに安眠させ あの世に旅立たせるのは人間の義務ではないだろうか？

高齢者の安楽死

自動車の発達が生み出したように医学の進歩が高齢者の増加という副作用を生み出した。経済的に豊かな人はともかく、生活が楽でないとか、病気をしても十分な治療や介護を受けられないような人達は長生きする事自体が苦痛になる。インド北部のパラナシという都市に「死を待つ家」がある。この場所には「最期は聖なるガンジスのほとりで死にたいという多くの老人が全国からやってくる。パラナシで荼毘に付され、遺灰をガンジスに流してもらうことが最高の幸せなのだ。この家はカトリックのマザー・テレサが30年ほど前に設立した。ここには社会から見捨てられた老人や身障者が常時80人ほど収容されている。この「家」には全国から元公務員、会社員、教師、農民等々 様々な経歴を持った人がやってくる。インドでも核家族化が進み、人間も捨てられる。そういう人達がこの「家」で修道女の世話になって「死」を待つ。このような修道女の世話になれるインドの人達は幸せである。

日本では、自宅療養/介護とか施設に入り介護員の世話になったり訪問介護を受けたりする。介護員は重労働と低い給与でくたくたになっているという話をよく聴く。在宅介護が大変な事は雑誌や新聞によく出ている。介護がもとで家族崩壊とか介護のストレスが虐待を生み、時には殺人とかが起こる。日本にも修道女の世話になりながら「死」を待つ場所が出来ればいいのと思う。介護で苦しんでいる老夫婦には夫なり妻なりを殺して自分も死のうと思っている人が相当数存在すると推定される。然し、殺人を犯したり、自殺をしたりすると面倒なことになり家族や周りの人に迷惑がかかる。夫が痛みを苦しんで悲鳴を上げても、妻は足腰が立たず夫のそばへ近づけない等はまさに生き地獄である。

「生きる」ということに何らかの意味があるなら高齢者は優に「その意味するもの」を全うしているはずである。

「もう 生きるのは沢山だ。死なせてくれ」と叫んでいる人を安らかに死なせてあげることは出来ないものか？

人間が人間を殺すことは許されないし、人間の一存で人間の生命を操作するべきではない。然し、本人が「死にたい」と泣き叫んでいるものをそのまま放置していいものだろうか？

死にたい人間を無理に生かし、さらに苦しめる非人道的行為を断ち切る方法がある。安楽死を認める環境整備が出来ていない日本では極めて難しい問題だが、苦しみがきながら、生きることを強要される人間は急激に多くなる。苦しんでいる人の立場にたって、誠意を持って議論する時期に来ている。急がねばならない。この問題は医師と法律家だけの問題ではない。社会全体の問題だ。

問題を解決する方法は極めて簡単だ：「高齢者自殺相談所兼自殺執行所」を設立する。死にたい人は「相談所」に申し出る。相談員は自殺志願者の家に赴き、本人と面談し「自殺志願」の意思を確認するとともに「死ぬ」以外に他の方法がないかどうかを厳重にチェックする。自殺が本人のために一番よい方法ということが確認されれば自殺執行所に運び自殺を執行する。方法は米国の死刑囚に対する薬殺刑と似た方法である。違う点は普通の寝室のベッドに横たわってもらい、あるいは、本人が希望すれば自宅の寝室のベッドなり布団に横たわってもらい、本人の好きな音楽

を聴かせ、本人の好きな花を室内にいっぱい置いて好きな花の香りを室内に充満さす。後は注射のうまいベテランの看護婦が三種類の薬物を段階的に注射する。最初に非常に強力な麻酔薬を注入し、昏睡状態になって意識を失ったところで、二番目に筋弛緩剤を注入して肺機能を停止させて呼吸が止まり、最期に心臓の機能を停止させる溶液を注入して心臓を停止させ絶命する。いずれもよく知られた薬物であるが最初に注入する麻酔薬は特殊なものらしく、米国にメーカーが一家しかなくそのメーカーは需要が少なくて採算が取れず閉鎖に追い込まれるかもしれないということである。夫婦で同時に自殺を希望する場合はダブルベッドなりシングルベッド2台をくっつけて二人並んで横になり、二人の手を重ね合わす。二人は手を取り合った状態で仲良く天国へ旅立てる。絶命するまでのプロセスは一人の場合と同じであるが、看護婦は二人で老夫婦が同時に絶命するように配慮する必要がある。自殺志願者が伴侶に先立たれ犬や猫が伴侶の代役を務め、主人の死後、面倒を見る人が居なくて、路頭に迷う場合は主人と一緒に昇天するように配慮すべきだろう。

米国で同じ三種類の注射で死刑を執行した場面に立ち会ったジャーナリストは執行台のすぐ前に座って死刑の様子を観察したが、死刑囚が気持ちよく眠っていて絶命する前にいびきをかいていた死刑囚も居たとの事で死刑執行に立ち会った被害者の家族から、苦しむ様子が全然なく、もう少し苦しむように出来ないものかと異議が出されたとの事である。この方法であれば高齢者は間違いなく安楽死できる。自殺後の煩雑な問題もなく、遺族も白い目で見られることもなく、遺体搜索とか、身元確認とか、検視とかその他の煩雑な手続きもなく、費用もかからず、本人を安らかに天国へ送ることが出来る。小生の母親は一日の仕事が終わり寝る段になるといつも「寝るほど楽はなかりけり」と言っていたが、将に「死ぬほど楽ななかりけり」である。

オランダでは「安楽死法」具体的には「要請に基づき生命の終焉及び自殺幫助に関する手続き法」で（１）患者（１２歳以上）の自発的で熟考された要請がある。（２）苦痛が耐えられないもので改善の見込みがない（３）患者に詳しく状況を説明する。（４）他に適切な対処方法がない。（５）第三者の医師の意見を聴く。（６）適切な医療処置によって生命の終焉、自殺幫助を行うの６条件を満たせば医師は殺人罪や自殺幫助罪に

問われない。オランダの安楽死法を支えているのは「患者の意思（自主的判断）を尊重しよう」という医師と患者の家族の姿勢である。「安楽死」の方法は医師が筋弛緩剤などを患者に注射する「積極的安楽死」と医師が死に至る薬剤を患者に処方する「自殺幫助」がある。安楽死の対象を人生に疲れた「健常者」にまで広げるか否かの議論が広がっている。自主的判断という観点から言えば人生に疲れた人に「死に至る薬剤」を与えることも認められるべきというキャンペーンが行われていて痴呆症患者や慢性の精神科の患者の意思をどう扱うかが課題となっている。オランダでは国民の８０％以上が「安楽死」を受け入れているし「積極的安楽死を認めている国はオランダ、スイス、ベルギー、ルクセンブルグ、米国（ワシントン州とオレゴン州（尊厳死法））である。（注）尊厳死法とは無意味な延命治療を患者の意思によって中止すること。

精神的苦痛は時として肉体的苦痛より苦しく残酷である。日本は「安楽死法」については極端に遅れていて、日本ではハードルが高いが苦しんでいる人のことを考える感受性と人道的立場から真剣に考えて「高齢者救済・安楽死幫助法」が一日も早く成立するよう皆で努力しなければならない。安らかに、眠るように死ぬことは万人の願いである。健康な老人もいつでも死にたいときに死ぬというオプションがあれば余生を心配なく過ごせる。残酷で凶悪な方法で殺人を犯した殺人犯が法律で保障された方法で安楽死し、真面目に一生を全うし、医学が進歩したばかりに長生きをさせられ、むごく、痛ましい自殺を遂行しなければならないというような不条理な事がいつまでも続いていいものであろうか？「ピンピンコロリと往きたかったけれど、難しいわね」という言葉は老いの現実に立ち向かう訪問介護者がよく聞かされる言葉である。静かに、苦しむことなく死ぬことは、生まれた以上死ぬことが確定している人間そのものの願いである。